『土御門院女房日記』考

山崎桂子

はじめに

新出伝本に出会うということは今日でも我々のよく経験するところで、いつでもそれは心躍る瞬間である。しかし、これまでに全く知られていない新出の作品、しかもそれが自分の目下の研究対象に関わる、というような出会いは滅多にないことではなかろうか。

土御門院に仕えた或る女房が記した家集風の日記、これが冷泉家に蔵されていることが報告され、写真版で冷泉家時雨亭叢書第二十九巻『中世私家集五』（朝日新聞社）に収められたのは平成十三年四月のことである。書名が不明のため「土御門院女房」と仮称され、井上宗雄氏の解題が付された。土御門院の和歌を研究していた私はこのような作品があったことに驚き、大きな関心を持って論考と注釈[1]を発表したものの、その後の成果を報告できぬままになっていた。この度ようやく二回目の注釈作業を終え、公刊[2]の見通しがついたのでその間の考察結果を報告しておきたい。若干既発表の論と重なるところがあるが、新たな知見と訂正を加えている。尚、今回『土御門院女房日記』という書名にしたことについても論及し、大方の了解を得たい。

一、書誌

井上氏の解題によると、本書は縦十二・二㎝、横十二・〇㎝の枡形一冊本で、内・外題はない。本文料紙は薄茶色または黄色系の薄様の雁皮紙と、やや厚い雁皮紙。表のみと両面の書写がある。一面五～八行書き。和歌が文章より一、二字分下げて書かれている。和歌は三行または三行プラス数文字で書写。散らし書き風の部分もある。四十四丁。奥書等はない。料紙には、銀泥流し、金銀切箔、野毛を散らしたものがあり、この詳細は井上氏が表にして示されている。料紙には全体にわたって虫損が多く、しみ・墨による汚損もあ

る。本文は鎌倉中期の写しで、江戸中期頃に改装されている。改装時に補われた紙表紙に包まれており、その前表紙中央に当時の筆で、

　此集は土御門院につかへまいらせし女房のかける物とみゆ
　もし家隆卿の女小宰相などにてやあるらん

と書かれている。ここから「土御門院女房」と井上氏が仮称されたもので、本来の書名の存否は不明である。

右の他に本書には書誌的に複雑な特徴がある。その一つは装丁の方法で、井上氏は次のように述べられている。

当初この書は、装飾料紙を一枚ずつ重ね合わせ、右側中央部に二穴を穿って大和綴じ様に糸綴じしたものと思われる（いま糸はなく穴のみ見出せる）。そののち汚損がはげしくなった故か、江戸中期頃にいったん本を解体、上下に二穴ずつ穿ち、やや太目の糸で綴じ直している。

これによると、原装丁も改装も古書冊としては極めて特殊な装丁である。十二㎝四方の枡形の紙を四十四枚重ねて右側を綴じただけなのである。

このような装丁のものに、冷泉家時雨亭文庫蔵の玄就筆合写本「御製歌少々・近代秀歌（乙）・夜の鶴」がある。このうちの『御製歌少々』（冷泉家時雨亭叢書第三十巻『中世私家集六』所収、平成一四年、朝日新聞社）の解説担当者である井上宗雄・浅田徹両氏はこのような装丁方法について「適切な呼称を知らない」と述べられつつも、この本は本来綴葉装だったものの、綴じ目が傷んだためにノドを裁ち落とした上でそのまま簡易に綴じ合わせようとした結果であると解説されている。両氏も指摘のように本文がノド近くまで書写されており、特殊な装丁となった事情が納得される。

しかし『土御門院女房日記』は本来綴葉装だったわけではなく、当初からこのような装丁で、もとは二穴。後に上下二穴ずつに改装されただけである。『御製歌少々』の例からこのような綴じ方が無かったわけではないことはわかるが極めて珍しい例であろう。しかも前述のように料紙の厚さと装飾の有無がまちまちで、紙質の違うものを取り合わせたもののようである。厚さの違う紙を混ぜる例としては同じく冷泉家時雨亭叢書第十巻『為家詠草集』（平成一二年、朝日新聞社）中の『秋思歌』の例がある。これも縦十五・八㎝、横十四・三㎝の枡形本で全六十丁、綴葉装である。佐藤恒雄氏の解説によると、薄手と厚手の二種類の楮紙打紙を用い、厚手の料紙には両面書写、薄手の料紙には片面書写を原則としているが、後半には薄手の料紙でありながら両面書写のところもある。これは後に行くにつれて料紙の余裕が少なくなったからかと推測されている。片面書写のところは丁の表に書写されており、見開きにすると右面は白紙になっている。

一方、『土御門院女房日記』の片面書写部分は必ず見開きで続く

ように書写されている。つまり半丁ずつの白紙にならないように、一丁裏と二丁表に書写、二丁裏と三丁表は白紙（実際は薄様のため裏写りがしている）という具合である。『秋思歌』のような例は珍しくないと思うが、本書の場合は装丁方法も相俟ってずいぶん風変わりな印象を受ける。転写本だとすると果たしてこのような写し方をするものなのか、疑問が残る。井上氏が「鎌倉中期の写し」と述べられていることからすると、作者が手持ちの料紙を取り集め、重ねて書き付けた自筆本ではないか、との想像も湧く。

そこで書写形態を詳細に見てみると、和歌部分なのに書き出しが一字下がっていない所、行頭から書かれるべき地の文章が前段末尾に続いている所が各一箇所ずつある。また長歌部分も冒頭五行は句間に一字分の空きがあるものの、以降は続けて書かれている。作者自身の手になるものであればこのようなことは起こらないのではなかろうか。とは言え孤本であり、今日まで作品の存在すらも知られて来なかったことからすると、原本に非常に近い転写本ということになろう。

もう一つの書誌的特徴は本文料紙と同質の小紙片が丁間に残存している点である。これは五丁裏左端、十七丁裏右端、三十五丁裏左端、四十丁表右端上下にあり、原装の綴じ穴のあるものもあるようである。何らかの本文が書かれていたが、後から切り取られた、その名残の小紙片、という推測も袋綴ではないので可能であろう。しかし井上氏もこれら小紙片の前後に脱落があるのかと疑われつつも「歌・文は連続しているようである」と述べられている通り、内容的に脱落があるとは思われない。これら小紙片の残存については不明と言う他ない。同様に緩衝料紙（藤本孝一氏所説）と思われるものも数カ所に亘って存在し、詳細が表にして示されている。末尾には緩衝料紙と共に装飾料紙も数枚存在し、井上氏は「なお後文が存在したか」と想像されているが、長歌で完結していると見て不自然さはない。むしろそこに長歌が置かれていることが完結を示していると理解すべきであろう。

二、書名

本作品は土御門院に仕えていたある女房が院のことを回想して綴った小品で、長歌一首を含めて四十三首の和歌と文章からなる。和歌が文章より一、二字分下げて書かれているところから、井上氏は「形態的には仮名日記と言えるであろう」とされている。田渕句美子氏[3]も前出の『秋思歌』『御製歌少々』同様に本作品が故人を追悼する内容の作品であり注目されること、就中『御製歌少々』は和歌が一字下げて書写されており、本作品と共に「歌集的な日記」と言うべきものであると述べられている。

重要なのは作者の意識である。日記として書いたのか、家集としてまとめたのか。本書が作者の自筆原本であればその形態は重要な

意味を持つだろう。たとえ転写本であるにしても書写者がむやみに形態を変えるとは思われないので原本の姿を反映しているとみてよかろう。『御製歌少々』の他にも、例えば『信生法師集』の前半部と後半部の違いなどは象徴的である。

前稿②③で『和泉式部集』と『建礼門院右京大夫集』（以下『右京大夫集』）からの影響については既に言及しているが、今回新たに気付いた重要な点は、作者が執筆に際して最も強く影響を受けたのは『高倉院昇霞記』（以下『昇霞記』）であったということである。これに『右京大夫集』[4]を併せ用いて本日記は書かれたと思われる。『昇霞記』は源通親という男性貴族の手になる仮名の、和歌を含む日記であるが、全体が漢詩文や史書、仏典を典拠とした漢文的教養の産物とも言うべきもので、女性である本日記作者が生硬なそれから影響を受けているということはいささか驚きであった。しかし『昇霞記』は当時よく読まれていたらしく、前出『御製歌少々』が『昇霞記』から影響を受けているのではないかとの指摘[5]があるし、『昇霞記』鎌倉中期の写本である梅沢記念館本は阿仏尼筆との伝承を持つ[6]。『右京大夫集』は周知の如く日記的家集であり、伝本の中には和歌を下げて書写する伝本も複数あることが報告されている[7]。

両書は故人を偲び追悼するというテーマで書かれ編まれた、作者にとって近い時代の親しい作品であった。作者は上皇の崩御という点では『昇霞記』を参考にし、愛する男性との別離と死という点では『右京大夫集』を参考にしたのだが、スタイルの上では『昇霞記』のような文章は書くべくもなかった。やはり同性である右京大夫の作品が意識されていただろう。作者の見た『右京大夫集』が和歌を下げて書かれていた、というのは好都合な想像であるが、そこまで言えなくとも作者が書こうとしたのが『右京大夫集』のような作品だったとは言えよう。

類似箇所の実際については後述するが、『昇霞記』とは三十箇所、『右京大夫集』とは二十箇所を数えることができる。両書を座右にして書いたと言っても過言ではない。『昇霞記』が散文であり、『右京大夫集』が異例に長い詞書を持つ韻文であることが本作品の形態をも規定したと思われる。

従って本作品を日記的家集とみることは何ら差し支えないとは思われるが、『右京大夫集』との大きな違いは本作品がたった一つのテーマで貫かれていることである。右京大夫が家集冒頭で「ただ、あはれにも、悲しくも、何となく忘れがたく覚ゆることどもの、その折々、ふと心に覚えしを、思ひ出でらるるままに」書き置いたと言い、資盛との贈答歌や没後の哀傷歌が中心ではあるけれども、それ以外の隆信との贈答歌、七夕歌群や歌合歌などの題詠歌をも収録した全歌集になっていることとはやはり相違していると言わざるを得ない。恐らく本日記作者にも他の詠草がたくさん存在したであろ

うが、それらは一切入れられていないのである。

そのような観点からすれば『土御門院女房日記』と呼ぶのがふさわしいのではあるまいか。作品の主体は和歌で、地の文は短くて簡略ではあるが、次節で述べるように本作品が時系列に沿った回想によって書かれていることは女房日記の条件を十分に満たすものである。テーマの類似としては『讃岐典侍日記』を想起することもできよう。

田渕氏は「追悼記という一つの領域が歌文のあわいにある」[8]のだと述べられたが至言であろう。我々に求められているのは、追悼という目的のもとに書かれた家集的作品として『土御門院女房日記』を享受することである。私自身ここに至るまで紆余曲折したが、本来の書名の有無さえも不明なこの小作品を文学史上に位置づける第一歩として、まずは書名を与えてやりたいというのが本意である。了解を得られ広く用いられることを望みたい。

三、構成と内容

本日記の構成と内容を年次を示す表現に留意してまとめると次のようになる。前稿②ではA～Hに分けているが、今回A～Kにして年次にも訂正を加えている。【1】～【41】は前稿③に付している段落番号である。

A 序・土御門院の経歴（配流まで）…【1】
B 配流時の状況……承久三年（一二二一）閏十月十日【2】～【4】
C 土御門殿での日々……同年年末まで【5】～【23】
D 正月になって……貞応元年（一二二二）正月【24】
E 春になって……貞応二年（一二二三）春～七月【25】～【29】
F 三年目の年の暮れ……同　年十二月【30】【31】
G また秋になって……嘉禄元年（一二二五）秋【32】
〈空白六年間〉
H 崩御……寛喜三年（一二三一）十月十一日【33】【34】
I 四十九日……同　年【35】【36】
J 一周忌……貞永元年（一二三二）十月十日～【37】～【40】
K むすび・土御門院の生涯……同　年【41】

冒頭【1】は全体の序のような趣で、四歳で即位し、在位十二（十三カ）年、上皇として十（十二カ）年[9]、そして配流という土御門院の経歴を述べたものである。ここで作者は「御ともすべきみ」と思いながらも都に留まる。これをAとする。

【2】～【4】は配流の時の状況が描かれる。従って承久三年（一二二一）閏十月十日のことである。下向前に堀川の堂にしばし寄られる院の御供に参り、最後の別れをしたことが記される。いよいよ

院の乗る輿が寄せられ、その様子を歌に詠む。これがBである。

【5】には「土御門殿にかへりまゐりて」とある。土御門殿は土御門院の母である承明門院在子の御所で、作者は院の配流前も後もここに居住している。以下【23】まで土御門殿での悲しみの日々が語られる。この部分は量的にも充実しており、出立の時を思い出して涙し、旅の空の院に思いを馳せて涙する、という配流後の明け暮れが折々の歌と共に詳細に描かれている。これをCとする。

【24】は「なげく〳〵正月にもなりぬ」とあるので、配流の年も暮れた貞応元年（一二二二）正月のことである。続く【25】にも再び「春にもなりぬれば」とある。【26】は出仕を促される話。【27】～【29】は忍草・山吹・立秋と季節の順に折々の歌が配列され、同年に係る一連と見られる。しかし【29】で、

うき事はみな月はつとおもひしに秋たつ日こそ又かなしけれ　（三一）

と詠まれている。「憂きことは皆尽き果つ」と思っていたのにすぐまた人が物思いに沈むという秋になってしまった、というのである。この前後の立秋の日を調べてみると、貞応元年は六月二十一日、貞応二年は七月三日、元仁元年（一二二四）は七月十四日である。[10] 水無月が果てた後に立秋となる、つまり立秋が七月にあって歌の内容にふさわしいのは貞応二年であろう。すると少なくとも【29】は貞応二年のこととなる。すると【29】以前のどこからが貞応二年になるのか判然としないが、やはり【25】の「春にもなりぬれば」が貞応二年の春となろうか。貞応元年の記事は【24】のみとなるが、これをDとし、【25】～【29】を貞応二年春から七月のこととしてEとしておきたい。

【30】には「なげかしさもみとせになりぬとしのくれに」とある。これを配流から三年目の元仁元年十二月であると前稿②③では考えていたのだが、足掛で数えて【29】と同年の貞応二年十二月と解すべきであった。[11] 訂正しておきたい。【30】【31】をFとする。

【32】は「又、あきにもなりぬ」とある。右の訂正に従えばFの翌年元仁元年秋となるが、「又」は必ずしも翌年とみる必要はなく、ここは前稿②③での推定通り嘉禄元年（一二二五）の秋としておきたい。Fの翌々年である。秋の風物に言寄せた一見何ということもない段のように見えるが、その中の歌、

かへりこむきみまつむしのこゑきけば秋よりほかにうれしきはなし　（三四）

の「かへりこむきみまつ」に込められている期待、すなわち土御門院の還御には裏付けがあったと思われること、それが『明月記』同年四月廿六日、六月二日両条に見られる土御門院還京の巷説であったことは既に指摘したところである。松虫の歌によって読者にも還御の期待を抱かせる。これをGとする。

しかし【33】で突如崩御が語られる。

かくれはておはしましぬれば、ゆめにゆめみる心ちして、つや〳〵とうつゝの事とも覚えず。

崩御は寛喜三年（一二三一）十月十一日のことであった。それ以前に不例であるなどの情報を得ていただろうが、そのようなことは一切書かれていない。しかも【32】と【33】の間には六年の時間経過があるが、その間のことも書かれていない。衝撃的な出来事をより効果的に描こうとした作者の意図が感じられる。【33】【34】をHとする。

以下は崩後の仏事に際しての詠が配されている。【35】の「浄土に御まゐりとき、まゐらせてのちは」は七七忌に際して詠まれたものであろう。【35】【36】をIとする。

【37】には「みやこをたゝせおはしまし、日はけふぞかし」とあり、崩御の翌年貞永元年（一二三二）十月十日に十一年前の配流の時のことを思い出している。そして翌日の【38】十一日が祥月命日であるから、ここは一周忌で、【39】「御はての日、ちやうもんしていづれば」はその忌明けである。【37】～【40】をJとする。

このあと【41】では「はるのはじめよりとしのくれまで、こしかたゆくさきやすむ時なく覚えて」として長歌が詠まれるが、これは何時のものであろうか。長歌は、

はつはるの　十日あまりに　くらゐ山　うつしうへてし　まつがねの　いつしかこだかく　なりしより

と、土御門院の生涯を即位の時から言祝ぎつつ述べ始め、末尾は、

いかにせましと　なげくとも　月日のみこそ　かさなりて　たとへむかたも　なかりけれ　返す〳〵も　なにせんに　春をうれしと　おもひけん　はてはかなしき　神な月哉　（四三）

となっている。「月日のみこそかさなりて」「はてはかなしき神な月かな」をJの一周忌から一年の月日が流れていると見れば天福元年（一二三三）十月の三周忌にあたっての詠となる。前稿②③ではそのように解したが、【37】～【41】までを一周忌の前後一連のものと見ることもできる。どちらの可能性もあるが、一周忌が月忌の果て（限り）であること、強い影響を受けている『昇霞記』が高倉院の一周忌で終わっていることから、本日記も一周忌を区切りとして長歌を以て閉じられたと考えたい。反歌は添えられず、作品はここで終わっているのだが、格別の不自然さはなく完結していると見てよかろう。これをKとする。

以上によって、この日記は承久三年の配流時から貞永元年の一周忌まで十二年間のことを時間の経過に従って整然と書いたものであること、その内容をA～K十一のまとまりとして把握できること、が理解されよう。

その中で土御門院が土佐から阿波へ遷されることを和歌一首と共に記したCの【7】に時間の飛躍があるのではないかと思われる点については前稿②で述べた通りである。

日記の場合、書かれていることと同様に書かれていないことにも注意が必要である。例えば貞応元年七月二日には作者が居住している承明門院御所が火災に遭っている（「七月二日、今夜子刻、承明門院御所〈土御門萬里小路〉焼亡、放火云々」『百練抄』）。しかし作者は全くそのことを記していない。作者の身辺に起こった大きな事件と思われるが、本作品の主題に関わらないためであろう。ここにも土御門院の追慕という一つのテーマで貫く姿勢を見ることができる。

四、登場人物

本作品に登場する人物で土御門院以外に特定できるのは「土御門の大納言」源定通（一一八八～一二四七）と「女院」承明門院在子（一一七一～一二五七）の二人だけである。この二人については前稿②③に述べている。尚、承明門院について付言すれば、彼女自身の和歌は一首も残されていない。しかし八十七才で没するまで長命を保ったため、その御所土御門殿は譲位後の土御門院、潜竜時の後嵯峨天皇、東下前の宗尊親王と三世代に亘る皇統の拠点であった。同時にそれら至尊を中心に、実家である土御門家の通光、通方や小宰相のような歌人達が集う文化的拠点でもあった。作者もまさにそのような中にあって本日記を物したのである。

五、作者の推定

この日記の作者は一体誰なのか。この点についても前稿②で、

・院の寵愛を受けるという関係にあった女性

・皇子女は産んでいない

・土御門院没後一周忌までは出家していない

・長歌を詠んでおり、歌人としての力量は備えている

と述べた通りで、それ以上のことは作品中からは見えてこない。

承明門院小宰相の可能性も依然残されているし、他にも『尊卑分脈』等から土御門院または承明門院に仕えていた女房として数名の名を拾うことが出来る。その中には和歌を残す内裏女房の土御門院伯耆や藤原隆信女である土御門院内侍（少将内侍）と承明門院右京大夫などがいる。いずれも作者の可能性なしとしないだろうが、現時点では決しがたい。本日記が冷泉家に蔵された経緯と併せて解明されねばならない。

また作者推定の有力な手掛かりと思われたEの【26】再出仕の話についても、後述のように『右京大夫集』などに触発されて結構されたものではないかと思われる節もある。作者の実像と作者の描きたかった自分とを峻別しながら日記の中に読み取っていく必要があるだろう。

六、『昇霞記』からの影響

本日記と先行作品との類似として気付いたところは、管見の内ながら『昇霞記』三十箇所、『右京大夫集』二十箇所、『和泉式部集』七箇所、『讃岐典侍日記』七箇所である。『たまきはる』は成立の時期も問題となるが、影響を受けているとは言えそうにないこともわかった。また『更級日記』との類似も一箇所あるが、類似個所の認定はその大小やレベルで諸説あろうし、それらが意図的かどうかは更に検討が必要である。右の『昇霞記』『右京大夫集』は主要な語彙の類似レベルまで数えたものである。この他にも本歌や引歌、類歌などがあるが、詳細は公刊予定の注釈に譲りたい。ここでは粉本とも言うべき『昇霞記』からの影響を七箇所掲げて論したい。

〈例1〉

みにかへておもは［ぬ］□しもなきもの□とまるはをしきいの□なりけり　（一）

この歌は日記冒頭【1】にあるもので、欠損部があるものの「我が身に代えても都にお留めしたいと思わぬわけではないが、それも叶わず、この世にとどまるとは残念なわが命である」との意であろう。これは『源氏物語』の「をしからぬ命にかへて目の前の別れをしばしとどめてしかな」（須磨・一八六）を本歌としていると見るべきだが、『昇霞記』に同じくこの源氏歌を本歌とする、

惜しからぬ命をかへてたぐひなき君が御代をも千世になさばや　（一〇）

がある。この歌は『昇霞記』序文に続く本文の第一首目に位置しており、本日記中の位置とも共通しているのである。

〈例2〉

わがそでをなに、たとへむあま人もかづかぬひまはぬれずとぞきく　（一七）

これは「伊勢島や一志の浦の海人だにもかづかぬ袖は濡るるものかは」（千載・恋・八九三・道因）を踏まえる。海人の衣は常に濡れていると言うが、それでも潜かぬ時は濡れていないという論理で我が袖の涙の隙なさを歌う。が、同じ道因歌を踏まえた、

しほたるるそのあま人をきくからにかづかぬ袖も濡れまさりけり　（二二）

が『昇霞記』にある。〈例1〉の源氏歌もここの道因歌も著名なものであるから作者は知悉していたとは思われるが、『昇霞記』からの影響もなしとしないだろう。

〈例3〉

御はての日、ちやうもんしていづれば、

かへるさはいとゞ物こそかなしけれなげきのはてはなほなかりけり　（四一）

一周忌の忌明けの日、寺から退出する時の感慨を詠んだものであ

る。「帰り道はひとしお物悲しく思われる。果ての日とは言うものの嘆きの果てはやはり無いのだった」。これは『昇霞記』四十九日の条で詠まれる次の歌と類似している。

昨日こそ限りの日とは聞きしかど飽かぬ別れは果てなかりけり　（二一一）

〈例4〉

ひむがしむきの御つぼにくれたけをうゑられたる、みいだしてふしたれば、風のふくにあはれもせむかたなし。

よろづよのともとぞうゑしたけのはに□とりかなしき風わたるなり　（八）

土御門殿での日々を描いた段である[12]。これは『昇霞記』四月の記事、

閑院の朝餉の御壺に植ゑさせ給ひたりし竹を法華堂に移されたるが、緑変らぬを見て、

思ひきや雲井はるかに見し竹をうきふししげき庭に植ゑんと　（一四〇）

に状況が似ている。同じく竹ではなく松で、しかも枯れた例だが、

閑院に参りて、見廻るに、御壺に植ゑられたりし小松が心地よげなりしが枯れたるを見て、千歳もいまだ経ぬに、憂きことを思ひ知りけるにやと、あはれにて、

引き植ゑし君や恋しき心なき松の緑も色変りぬる　（七六）

の状況とも類似している。

本日記には山吹も「つぼねのまへに、やまぶきのうつくしくさきたるが、露にしほれてみゆるあしたに」と美しく描かれ、哀切な歌が詠まれるが、『昇霞記』にも「六波羅の池の汀に山吹の咲けるを見て」として山吹の歌が詠まれている[13]。全体に『昇霞記』では閑院第各所の青草・梅・桜・柳、六波羅池殿の夕顔・橘など植栽が季節を追って描かれ、それに感慨を催して歌を詠むという設定、それは画一的な印象は否めないのだが、が多いのである。本日記にも竹・山吹の他、桜・忍草が詠まれている。これらは小道具（植物）と状況設定に類似が認められる例である。

〈例5〉

浄土に御まゐり、ときゝまゐらせてのちは、つねの御くちすさみわすれがたくて、

夏の日のはちすをおもふこころこそいまはすゞしきうてなゝるらめ　（三七）

これは蓮と「口すさみ」という言葉とが類似する例である。四十九日に、院が極楽浄土に往生したと聞いた後、院のいつもの御口遊みの詩句が忘れられなくて、と歌を詠む。歌中の「夏日思蓮」は道真の詩序の一句。浄土の連想で蓮の句が導かれたのであろうが、『昇霞記』では通親の夢に故高倉院が蓮の蕾を持って現れる。その蓮の花が開くことで故院の極楽往生を確信したと描かれる印象的な場面

がある[14]。更に、

昔の秋、南殿へ出でさせ給ひて、「月ながむ」と御覧じて、「経難く見ゆる」と御口ずさみのありしも耳にたちて、（二七前文）

と高倉院生前を回想するところや、本日記と同じく四十九日に「…といふ言を朝夕口ずさみて」（六七前文）と顕基中納言の故事を述べる段がある。「口すさみ」という言葉に触発されて思い出の場面を構成するということも意識にあったかもしれない。

〈例6〉

みやこをたゝせおはしましゝ日はけふぞかしとおもふ。かなしくて、

かぞふればうかりしけふにめぐりきてさらにかなしきくれのそら哉　（三九）

十月十一日にかくれさせおはします。つごもりにくれゆくそらをみればうらめしくて、

十かあまりひとひすぐるもかなしきにたつさへをしき神な月かな　（四〇）

右は一周忌の頃である。「都をお発ちになった日は今日だったなあと思う。（それを思い出すと）悲しくて」と配流時のことを思い出しているのである。三九は「数えてみると、せつなかった十月十日の今日という日に月日が巡って来て、その日もやがて暮れると思うと更に悲しい夕暮れの空だ」の意である。この日が暮れると翌十一日は院の祥月命日になるので更に悲しいのである。この歌の「うかりしけふにめぐりきて」は『昇霞記』の、

御月忌に法華堂へ参りて、

月ごとに憂き日ばかりは廻り来て沈みし影の出でぬつらさよ　（一〇四）

と類似している。また〈例6〉は『昇霞記』の、

三月晦の日、大納言実国の卿のもとへ、昔の事など申しつかはすとて、（中略）

見し夢の名残の春を思ふにも暮れゆく今日はげにぞ悲しき　（一〇九）

（中略）三月尽、去年の今日など思ひ出でられて、

とも類似している。

〈例7〉

かくれはておはしましぬれば、ゆめにゆめみる心ちして、つゝ〳〵とうつゝの事とも覚えず。

おのづからこぎもやよすと思ひしをやがてむなしきふねぞかなしき　（三五）

右は土御門院の崩御を記す段である。「ゆめにゆめみる心ちして」は「悲しさのなぐさむべくもあらざりつ夢のうちにも夢とみゆれば」（後撰集・哀傷・一四二一・大輔）に拠るもので、俊頼の長歌にも「夢に夢みるここちしてひま行く駒にことならじ」（堀河百首・一五七六）とある。だが、直接的には平家一門の都落ちを記した

『右京大夫集』二〇五の詞書「夢のうちの夢を聞きし心地、何にかはたとへむ」や『昇霞記』の四十九日詠と百日詠、

あさましや夢に夢みるうたたねに又うき夢をみるぞかなしき　（七二）

はかなしや夢に夢みる世の中にまだ夢見ずと嘆く心よ　（八五）

の影響下に書かれたものだろう。

また歌中の「むなしきふね」は本来上皇の唐名「虚舟」の歌語で、後三条院の「住吉の神はあはれとおもふらんむなしき舟をさしてきたれば」（後拾遺集・雑四・一〇六二）に拠るものであるが、ここではその上皇が虚しくなる（亡くなる）意で用いられている。これは『昇霞記』の、

池水は水草覆ひて沈みにしむなしき舟の跡のみぞ見る　（九三）

という崩御を意味する「沈みにしむなしき舟」を介することによって生まれた表現であろう。

以上、〈例1〉〜〈例3〉のような和歌の類似のみならず、〈例4〉〜〈例7〉のように詞書や地の文の言葉、状況設定にも類似が見られるのである。

七、内容上の問題点

本節では日記の内容に関して問題と思われる点を取り上げ、考察してみたい。

一、宿直所への退出

御所にてはあたりになぐさむかたもなく、いまもみまゐらするやうなれば、とのゐどころにいでたれば、いとゞなぐさむかたもなくて、

やどかへておもふもかなしいかにせんみをもはなれぬきみがおもかげ　（二二）

承久三年末頃の段である。土御門殿内の元仙洞御所だった殿舎に作者はいるのだろうが、そこは院の思い出がたくさん残っており心の慰むところもないので宿直所へ出たのだが、という段である。まず『右京大夫集』に、

ためしなきかかる別れになほとまる面影ばかり身に添ふぞ憂き　（二二五）

があり、この前後に「あやにくに面影は身に添ひ」（二二三詞書）「なぐさむこともなきままに」（二三二詞書）という表現がある。一方『昇霞記』にも、

・暁の懺法果てて、宿直所に出でて、つゆまどろまれず、留まるべき心地もせざりければ、　（二六前文）

・閑院の宿直所にまかりて、見廻りければ、夕顔描きたりし、何となく消え失せたるを見て、

夕顔の光を添へし白露の消えにし影ぞおもかげにたつ　（一一〇）

つくづくとなぐさむかたのなきままに昔語りぞひとり

乱るる　（一二一）

とある。この段が二書に拠っていることは傍線部に明らかである。

ここで少し憶測すれば、作者が宿直所に出たというのも『昇霞記』に触発されて結構された状況ではないかと思われなくもない。と言うのは「宿直所」という言葉の違和感である。通親は公卿であるから六波羅池殿の院御所や閑院内裏に宿直所（直廬）を持っていた。では本日記作者の宿直所とはどこをさすのか。前稿③では不明としたのだが、田渕氏は『源家長日記』で卿三位兼子の京極殿を「御とのゐ殿」、二条邸を「殿ゐ」と呼んでいること、また『たまきはる』に「候（さぶらひ）もみな（中略）夜などは皆近き宿直所へおのおの出でちりぬれば」と見えることから、御所近くに設けた自分の家や宿所を言ったものと解されている[15]。しかし『たまきはる』の例は男性の候（さぶらひ）についてであり、女房については「里より参る」「里にある」と「里」という言葉が使われている。卿三位兼子の例を適用するのもためらわれる。一般的には『昇霞記』のように御所内の宿直所を指すのが専らで、珍しい使い方である。しかも作者が承明門院御所の近くにそのような邸宅を持っていたというのも不審な気がするのである。

二、内裏への再出仕

みやづかへもひさしくなりぬれば、「内裏へまゐれかし」といざなふ人のあるにも、まづなみだのみところせくて、

さらに又おほうちやまの月もみじなみだのひまのあらばこそあらめ　（二八）

内裏への再出仕を促されたという段で、作者の推定に関わるとして注目されてきた。このように書いているからには出仕の話があったのではあろうが、多分に讃岐典侍や右京大夫などの内裏への再出仕を意識したものではないかと思われるのである。

例えば『讃岐典侍日記』では「流れの水を結び、さやかになり、親しくつかうまつる主とならせたまへば、おぼろけならぬ契りにこそと」と堀河院の子である鳥羽院への再出仕を決意する。右京大夫の再出仕先は後鳥羽天皇で、それを「思ひの外に、年経てのち、また九重の中を見し身の契り」としつつも「高倉の院の御けしきに、いとよう似まゐらせさせおはしましたる上の御様にも」（『右京大夫集』）と記すのである。

もし本日記作者が再出仕するとなれば後堀河天皇へとなり、土御門院の流れではない。『たまきはる』には「うとき女房の候ふもなかりき。ただ昔の御ゆかり、我が御乳の人の末々などばかり候しかば」と八条院女房について述べている。女院御所と内裏とでは事情も異なろうが、健御前の記すように主人との縁で女房の人選がなされるのであろう。しかも本日記作者の場合、主人であった土御門院は配流の身とは言え阿波に生存しており、還御の望みもあったのである。それを待たずに後高倉院の皇子である後堀河天皇に出仕する

というようなことは実際には考えにくいことではなかろうか。

主人の死に遭った女房が再出仕を求められるというパターンはよくあることで、それは憂きことではあるが、反面、女房としての有能性を語る誇らしいことでもあったのであろう。

三、長歌の表現

本日記は末尾に長歌を置く。長歌は『蜻蛉日記』以来の女流日記の伝統でもある。常套的な構成と内容の哀傷歌ではあるが、やはり『昇霞記』からの影響が顕著である。『昇霞記』には『堀河百首』の題を入れて詠んだ長歌が収められており、長歌を詠むという直接的発想はここから得たかもしれない。が、内容的には『昇霞記』冒頭の文章の方に類似が見られる。長歌の前半部を中略して引用する。

はつはるの　十日あまりに　くらゐ山　うつしうゑてし　まつがねの　いつしかこだかく　なりしより　あまつそらふく　風なれど　えだもならさず　おとなくて　たのみあふがぬ　人もなし　四海のなみも　しづかにて　ゆきかふゝねも　おそれなく　（中略）　花ももみぢも　月ゆきも　をりをすぐさず　ながめつゝ　十返り三つの　春秋は　こゝのへにてぞ　すぎこしを　みもすそがはの　ながれには　かぎりありける　ふちせにて　つひにはおりゐ　給ひにき　しづかなりける　うれしさと　きみをあふぎて　すぐすまに　[2]よのおゝあみに　ひかれつゝ　とさへあはへと　めぐりきて　あとにとまれる　あま人は　なみだをながして　すぐすかな

『昇霞記』の冒頭、前文にあたるところは次のように始まっている。

前の天皇の国しろしめす事十返二の春秋を送り迎ふる間、四海浪静かに、九重の花枝も鳴らさずして、国々の貢物おさを重ねて絶えず。朝な〳〵の政事も素直にして怠りなければ、諫めの鼓は打ち鳴らす人なうして鳥も驚かず。張れる網はかゝる類なければ思ひ馴れつゝ、九の年の蓄を持ち、（中略）藻塩草みる蜑人潜かぬ袖を濡らし、かゝる御世にあふみの湖、また遭ひ奉らん堅田浜の難くやあらんとのみ、倭文の苧環繰り返し思ひ乱るゝ。

さすがに漢籍の故事を引く部分との類似は少ないが、傍線部分は類似していると言えよう。但しこのような長歌は類型的な表現が多く、『昇霞記』のみとの類似とまでは言えないだろう。例えば『讃岐典侍日記』にも、

御裳濯川の流れいよいよ久しく、位の山の年経させたまはん、まことに白玉椿八千代に千代を添ふる春秋まで、四方の海の浪の音静かに、見えたり。

などとある。

しかし、ここで興味深いのは長歌中の「四海のなみもしづかにて」である。「四海」は『讃岐典侍日記』に言う「四方（よも）の海」と同

意で、波風がおさまって天下が平和なことを言う常套表現である。また「四の海にも浪たたず」（久安百首・九〇一・俊成）のように「よつのうみ」と和語化する。しかし、ここは字音で「しかい」と詠んでおり異例である。これは『昇霞記』に拠ったためではないだろうか。もちろん『昇霞記』本文は「よつのうみ」と読んでもよいのだが、長歌では「四海（しかい）のなみも／しづかにて」と七／五で、「よつのうみのなみ」では九音で字余りになってしまう。

『昇霞記』の諸本を見ると、最善本とされる鎌倉中期書写の梅沢記念館本を始めとして全て「四海」と表記している。「四の海」と表記するのは季吟書写の因幡堂蔵本のみである。[16] 恐らく作者は『昇霞記』を参考にする余り、その表記につられて字音で長歌に詠み込んでしまったのではなかろうか。座右にしていた証拠と言えよう。

長歌の中で問題と思われるのは不穏な表現が二箇所に見られることである。

第一は波線部1「みもすそがはのながれにはかぎりありけるふちせにて」である。御裳濯川は「君が代はつきじとぞおもふ神風や御裳濯川のすまむかぎりは」（後拾遺集・賀・四五〇・経信）の歌から、多く賀や神祇で詠まれる。皇室の祖神を祀る神宮の川なので通例はこのように流れが絶えないことを詠むが、ここでは「かぎりありける」と続けており、皇統の断絶を思わせて不審である。

「ふちせ」は「世の中はなにかつねなる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」（古今集・雑下・九三三・読人不知）から物事の変わり易さ、転変を言う言葉である。但し飛鳥川について言うのであって御裳濯川の淵瀬を詠んだ例は無く、やはり不審なのである。

後鳥羽院の意向により十六歳の若さで弟順徳に譲位したことによって、土御門天皇の皇統は途絶えることになったのである。このことを言ったものと解されるが、まだ後鳥羽院も順徳院も配流の身とは言え在世中であり、かなり大胆な表現である。

第二は波線部2「よのおあゝみにひかれつつ」[17]である。これは『昇霞記』の「張れる網」から発想した表現と思われる。『昇霞記』は「天網」の意で用いているのだが、長歌では承久の乱によって院が配流となったことを言っている。

「世の大網」の「世網」は世の中の係累をいう語である。承久の乱も土佐への下向も、まさに父と兄という世網に引かれたのであった。しかし和歌はもとより散文にも、「世網」や事件に連座することを「網に引かれる」とした用例が見出せないので、作者がこの漢語を知っていて意図的に使ったかどうかはわからない。とは言え、女性である作者の時代認識や批判的な姿勢が窺われることは注目される。このような作品であればやはり他見を憚ったのではなかろうか。

おわりに

本稿では『土御門院女房日記』という書名を提示し、『昇霞記』

からの影響を中心に述べたが、本日記の研究は緒に就いたばかりである。作品の評価はまだまだ多くの読者や研究者の論を待たねばならないだろう。

しかし、いささかでもこの作品の文学性について言おうとすると、どうしても粉本たる『昇霞記』の文学性ということになる。例えば本日記では歌と地の文とで十五箇所に「かなし」という語が繰り返し使われており、感傷に流れすぎている気もすると前稿②に於いて述べたが、水川喜夫氏[18]の言を待つまでもなく『昇霞記』には「悲し・はかなし・恋し・憂し・あさまし」などが頻用されているのである。つまり粉本とした『昇霞記』自体の達成度ということが関わってくる。

水川氏はその点について「短歌に長めの詞書を付したような挿話が、ほぼ月日を追って列記された如くである。それが、挿話の一つ一つに、ために合成した和歌一首ずつを付したように感じられる箇所の多いのは、例の詩心の乏しさによるのであろう」と述べられている。確かに『昇霞記』は漢文的教養には溢れているのだが、和歌は上手ではないし、散りばめられ過ぎた修辞によって哀悼の真情が打ち消されているようにも思われるのである。

有体に言えば『右京大夫集』を粉本にすればよかったのに、ということである。しかし書名の節で述べたように、作者は私家集ではなく追悼の日記を志向したのであろう。愛する人との別離と死という体験と悲哀を歌に詠み、先行作品に拠りつつ書き記そうとした心情はやはり感動を呼ぶ。時の流れに沿って自分の心を見つめ続けて行った本日記は首尾照応しており、冗長を排して小品にまとめていることも好感の一因である。長歌には土御門院弁護の気さえ窺われるし、通親が『昇霞記』途中に唐突に置いた長歌を本日記作者は末尾に置くことによって見事に成功させている。もしいささかでも瑕瑾があるとすれば、その責の多くは粉本に求めるられるべきかもしれない。むしろ出藍と言うべきか。

以下に本日記の段を二つ掲げて結びとしたい。

をかしき事もあれば、おのづからうちわらひなどするも、「こはなにごとぞや」とおどろかれて、

ありふればなぐさむとしもなけれどもなみだのひまのあるぞかなしき　（一六）

院が配流になって後、笑う日などあろうとも思われなかったのに気がつくと笑っている自分に驚き、時間の残酷さとでも言うべきものの認識を示した段である。これは『右京大夫集』で資盛からの手紙を漉返したことを記した部分（二二九・二三〇詞書）で、

ひとつも残さず、みなさやうに認むるに、「みるもかひなし」とかや、源氏の物語にあること思ひ出でらるるも、「何の心ありて」とつれなく覚ゆ。

と、そのような折にも『源氏物語』の一節を思い出してしまう我が

身を「つれなし」と見る姿と同様である。これを『右京大夫集』に拠って書かれたと言おうとするものではない。このような自己を客観視する一瞬というのは誰にでもあるもので、右京大夫の心境に通じるものを本日記作者も見事に描いていると言うべきであろう。

もう一つは貞応二年春の段である。

春にもなりぬれば、中門のさくらうつくしくさきたるをみれば、

きみまさぬやどにはなにとさくらばなかへらぬはるはえだにこもらで　（二二六）

おのがさくはるをもしらば心してことしは花のにほはざりせば　（二二七）

花こそ物は、とうらやましくも覚ゆ。

「中門」の辺りはかつて土御門院が好きな小弓をしていた所である。主なきその庭にも春は訪れ、美しく桜が咲いたのである。二六は「君まさで荒れたる宿の板間より月のもるにも袖は濡れけり」（古今六帖・二四八四・業平）を、二七は「心して今年は匂へ女郎花咲かぬ花ぞと人は見るとも」（栄華物語・五）をそれぞれ本歌とする。もちろん『栄華物語』歌は「深草の野べの桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」（古今集・哀傷・八三一・岑雄）に拠る発想である。末尾の「花こそ物は」は『金葉集』（二度本・雑・五二四）の、

後三条院かくれおはしまして、又の年の春さかりなりける花を見てよめる　兼方

去年見しに色も変らず咲きにけり花こそ物は思はざりけれ

を引歌とする表現である。[19] 和歌も文章も優れた段の一つである。

注

（1）①「新出資料『土御門院女房』（冷泉家時雨亭文庫蔵）の翻刻」（『志學館大学文学部研究紀要』第二三巻第二号、平成一四年一月）　②「冷泉家時雨亭文庫蔵『土御門院女房』の構成と内容―作者の手がかりを求めて―」（『中世文学』第四八号、平成一五年六月）　③「『土御門院女房』注釈（一）～（三）」（『志學館大学人間関係学部研究紀要』第二五巻第一号～第二七巻第一号、平成一六年一月～平成一八年一月）　以下、本論中でこれらを前稿①②③として引用している。

右以外に、『新編私家集大成CD-ROM版』（平成二〇年、エムワイ企画）に兼築信行氏による翻刻が増補として入れられている。また、田渕句美子・中世和歌の会「『土御門院女房』注解と研究（上）」（『早稲田大学教育学部学術研究―国語・国文学編―』第五九号、平成二三年二月）が出された。拙稿の欠を補い、新見を豊富に提示されているので併せ用いられたい。

（2）新注和歌文学叢書『土御門院御百首・土御門院女房日記新注』（青簡舎）予定

（3）田渕句美子・兼築信行「順徳院詠『御製歌少々』を読む」（『明月記研究』七号、平成一四年一二月）の研究篇（田渕氏執筆）。

（4）『右京大夫集』とテーマが近いことは田渕句美子氏も『新古今集後鳥羽院と定家の時代』（平成一二年、角川学芸出版）の中で言及されている。また、同書では本作品の全体についても要領よくまとめて紹介されている。

（5）注（3）に同じ。

（6）水川喜夫『源通親日記全釈』（昭和五三年、笠間書院）一八五頁

(7) 井狩正司『建礼門院右京大夫集校本及び総索引』(昭和四四年、笠間書院)
(8) 田渕句美子「鎌倉時代の歌壇と文芸」(日本の時代史9『モンゴルの襲来』平成一五年、吉川弘文館)
(9) 前稿②③では在位を十二年、上皇として十年としたが、本文に「十二□□□□」「十年□□□」と欠損があり、欠損部にそれぞれ「余り一年」などの文字があったと解すべきであろう。在位年数については末尾の長歌で「十返り三つの春秋」と詠んでおり、作者は十三年と認識していたと思われる。但し諸書によって「治十三年」(本朝皇胤紹運録)「御宇十三年」(皇帝紀抄)「治十二年」(皇代記)「在位十二年」(皇年代略記)「凡在位十二年」(六代勝事記)などとする。上皇として都にいたのは足掛で十二年(実質十一年間)になる。
(10) 内田正男『日本暦日原典』(昭和五一年、雄山閣出版)
(11) 本誌の査読子より指摘を頂いてこの古典の常識に気付いた。私もそのように考えるが、注(9)の在位年数のように数え方が一定していないことと、続く【32】が嘉禄元年秋のこととと解されるので【30】が元仁元年ではないかとの思いも捨てきれない。しかし元仁元年の記事がなくても問題はないので今回訂正した。査読子の教示に感謝する。
(12) この段が次へ続いて行く状況は『更級日記』の一場面とも類似している。前稿③参照。
(13) 末尾近くに通親が夢を見る場面があるが、その夢は故高倉院に仕えていた蔵人が山吹の花一房を折って持ってくるというもので、ここにも山吹が和歌(一四五・一四六)と共に登場する。
(14) この話も注(13)の山吹の夢と似ているのだが、それらの話は本日記作者にとっても印象的なものだったのであろう。
(15) 注(1)「『土御門院女房』注解と研究(上)」
(16) 注(6)三八七頁
(17) 「よのお丶あみ」は底本では「よのを[丶]あみ」。踊り字部分が少し見えにくくなっている。
(18) 注(6)一一四頁
(19) 『讃岐典侍日記』にも同じ兼方の歌を引用した段がある。本日記は表現が簡潔で、それも魅力の一つと言えよう。

※『土御門院女房日記』の本文は前稿③によるが、本稿では動詞の活用語尾など底本にない文字を補ったり、仮名遣いを訂したりしている。そのことを示す圏点や傍記などは除いている。

※『高倉院昇霞記』の引用は注(6)の水川喜夫氏の本により、同書に付された歌番号を示した。『右京大夫集』『讃岐典侍日記』は新編日本古典文学全集(小学館)、『たまきはる』は新日本古典文学大系(岩波書店)により、歌には『新編国歌大観』の番号を示した。その他の和歌の引用は『新編国歌大観』により、表記は私意による。

—やまざき・けいこ、志學館大学教授—